

こそできる教育です。

●最後のいのちの終末臨終です。

「このころ、小さい子どもさんが家族の臨終を目にする...」

「さすがですね。あんなに小さいのに、ひいばあちゃんとお浄土で会えることを知って...」

し、宗教的な死についての指導もできる場だと思いました。

身近な家族のいのちが終わった時、子どもが肉親の臨終をどのように受け止めるかを家族、とりわけ親はしっかり見つめていのちの教育をしなければなりません。

人間は生まれた瞬間から死に向かつて生きています。誰も死から逃げることはできません。予告なしに誰にも一度は必ずやってくる死、家族の誰にいつ死がやってくるかは、全く予想もつかないことなのです。死を意識することなしにいのちの教育はできないと思います。

四、「子育て」と「親育ち」

親は子どもと同年齢だということの本を読んだことがありません。とても共感させられ印象に残る本でした。

例えば、親の実年齢が三十五才であったとしても、子どもが十才であればその人が親

敬悼録

Table with columns for months (三月, 四月, 五月, 六月) and rows for names, birth dates, and ages.

として生きてきたのは十年だけ、つまり親年齢は十才だということです。「子育て」をする親にとっては実に大切なこと、子どもは親の持ち物ではないということを考えさせられました。第二子が生まれると、親はもう一つ第二子と同じ年の親人生を生きてることになるわけですから、親は子どもの数だけの親年齢をもつて豊か

に生きるようになります。子どもがいのちを引き継いで生まれてきてくれたからこそ親になることができ親人生ができるのです。一人ひとりの子どもに寄り添いながら子育てする親人生、それは子どもとともに成長する親育ちでもありましょう。子どもが生活の中で問題を持った時に、子どもと一緒に

問題を見つめ、今自分はいかに生きるべきかと自分自身に問いかけつつ「子育て」する親、いつも子どもとともに「親育ち」を続ける親であり家族でありたいものです。心の中にまでひびくいのちの教育は、「親育ち」する親によつてこそ可能で、すばらしい「子育て」です。

「『学校教育』広大附属小学校学校教育研究会編を再録」(完)

憲法九条を守る呉の集い
一音楽と講演
日時 八月二十六日(土) 午後十四時
場所 警固屋公民館
参加費 無料
講師 菅原龍憲さん(真宗遺族会代表)
(代表呼びかけ人) 荒本豆夫・岩崎正衛・木田重雄 熊佐明俊・後藤俊弘・信楽峻磨 星加哲男